

漢文訓読の初期条件（初稿）〔中〕

—なぜ孤立語を膠着語に変換できたのか？—

古田島洋介*

④ 副詞（統）〔附〕前置詞

英語の〈when, where, why, how〉に当たる漢文の疑問副詞は、疑問文・反語文を形成しますが、いずれも基本的に返り点を必要としません。

49 天下何時太平？（『宋史』岳飛伝） *何時=when

天下何れの時にか太平ならん？

50 沛公安在「安在」？（『史記』項羽本紀） *安=where

沛公安くにか在る「安く在りや」？

51 焉能事鬼！?（『論語』先進） *焉=why

焉くんぞ能く鬼に事へん!?

52 今日之事何如？（『史記』項羽本紀） *何如=how

今日の事何如？

右のうち、50「安在」の語順には、特に注意していただきたい。動詞「在」を用いるとき、たとえば「在此」（此に在り）のように、存在する位置・場所は「在」の下に記すのが一般です。存在する位置・場所を問うべく疑問詞を使う場合でも、現代中国語ならば「在哪里」のごとく、やはり疑問詞「哪里」（=where）を「在」の下に置きます。けれども、漢文すなわち古典中国語では語順が異なり、「在安」とせず、疑問詞「安」を「在」の上に持ち出して「安在」と書くのです。これは、例文17・18（前号一八頁下段）と同様の現象で、英語の〈wh-〉疑問詞が文の前方に出ようとするのと同じく、漢文の疑問詞にも上方に移ろうとする性質があると考えてよいでしょう。結果として、日本語の語順と一致するため、返り点は不要となるのですから、それだけ訓読の負担が軽減されているわけです。

次は、副詞句に目を向けてみましょう。副詞句とは、その名のとおり、いくつかの語が集まって副詞と同じ働きをする語群を指します。基本的には、英語の副詞句〈at the station, in my office〉などと同じく、漢文の副詞句も（前置詞+名詞）で構成されます。五つの代表的な前置詞「於・以・為・自・与」を用いる副詞句について、一例ずつ挙げてみましょう。「乎」や「于」は、ともに「於」と同義の前置詞ですから、「於」の用法に含めて考えてください。「從」や「由」も「自」の用法に準じます。

53 復見將軍於此。（『史記』項羽本紀） *於=at, in

復た將軍に此に見ゆ。

54 以_テ子_ニ之_ヲ陷_サ子_ニ之_ヲ楯_ヲ、何如？（『韓非子』難一）

*以_二by, by means of

子_ノ矛_ヲを以_テて子_ノ楯_ヲを陷_トさば、何_イか_ん？

55 吾_レ為_レ公_ノ取_リ彼_ノ一_ヲ將_ヲ。（『史記』項羽本紀）

*為_二for, for the sake of

吾_レ公_ノの爲_ニに彼_ノ一_ヲ將_ヲを取_リらん。

56 自_レ古_ノ皆_レ有_リ死_ス。（『論語』顔淵） *自_二from, since

古_ノより皆_レ死_ス有_リ。

57 君_王与_二沛公_一飲_ス。（『史記』項羽本紀） *与_二with, together with

君_王沛公_とと飲_ス。

53 「於此」だけは、中核動詞「見」の下方に位置する後位副詞句

(qualifier) ですが、54 「以子之矛」・55 「為公」・56 「自古」・57 「与沛

公」は、それぞれ中核動詞「陷・取・有・飲」の上方に位置する前位副

詞句(modifier)です。日本語には前置詞がなく、名詞の後方に助詞を

添えて表現するため、漢文の前置詞については、54 「以子之矛」・55

「為公」・56 「自古」・57 「与沛公」のごとく、どうしても返り点に

よる語順の変換が必要となります。53 「於此」も、かつては「於此」

(此に)のように返り点を付ける読み方がありました。ただし、前置詞

「於」を冠する後位副詞句が漢文に頻出するためか、今では逐一「於」

に返る煩を避け、53のごとく置き字として扱うのがふつうです。もっと

も、現在でも、「於+名詞」が前位副詞句ならば、名詞から「於」に返

し、またともに「於て」と訓ずる習慣です。一例だけ示しておきましょう。

58 於_レ物_ニ無_レ不_レ陷_サ也。（『韓非子』難一）

物_ノに於_テて陷_トさざる無_キなり。

中核動詞「無」の上方に「於物」が前位副詞句として記されています。こうした場合は、やはり前置詞「於」について返り点が必要となるわけです。これとは逆に、54・56の前置詞「以・為・自」が後位副詞句を形成するときも、返り点を付けざるを得ません。

59 使_レ民_ヲ以_テ時_ヲ。（『論語』学而）

民_ヲを使_フに時_ヲを以_テす。

60 凡_ソ吾_レ所_ニ以_テ求_フ雨_者、為_二吾民_一也。（『新序』雜事二一九）

凡_ソ吾_レが雨_ヲを求_ムる所以_ノの者_ハ、吾_レが民_ノの爲_ニなり。

61 至_二於_二三六_一雜言_一、則_チ出_レ自_二篇什_一。（『文心雕龍』明詩）

三六_ノの雜言_ニに至_リては、則_チ篇什_{ヨリ}出_ズ。

59 「以てす」は、訓読の便宜上、前置詞「以て」をサ変動詞化したものです。60 「為吾民」は、上文「凡者」の補語ですので、厳密には名詞句と考えるべきかもしれませんが、今は後位副詞句が形容詞句に転じられた用法と見なしておきます。61 「出_レ自_二篇什_一」は、59と同じく、前置詞「自」をサ変動詞化し、「出_レ自_二篇什_一」(出づること篇什より)と訓読することも可能ですが、いずれにせよ、「自」が返り点を要求することには変わりはありません。

要するに、漢文の前置詞は日本語に存在しない品詞のため、原則として、下接する名詞から返り点を用いて前置詞に返さざるを得ないわけです。例外は、53に現れた「於」を冠する後位副詞句だけと思ってよいでしょう。これは「於」と同義の「乎」「于」についても同様です。

⑤ 動 詞

漢文の動詞は、孤立語の孤立語たるゆえんを最も如実に表す品詞だと言ってよいでしょう。その特徴を一言でまとめれば、「無い^なない^づ尽くし」です。

日本人がヨーロッパの屈折語を学ぶとき、決まって悩まされるのが動詞にまつわる種々の活用変化です。たとえば、フランス語の動詞には、辞書の見出しとなる〈不定詞〉のほか、〈現在分詞〉〈過去分詞〉がある。それだけならば英語と似たようなものですが、時制として〈直説法〉〈条件法〉〈接統法〉〈命令法〉があり、さらに〈単純形〉か〈複合形〉かによって、〈直説法〉は八種、〈条件法〉は二種、〈接統法〉は四種、〈命令法〉は二種に分かれる。しかも、それぞれが〈人称〉三種と〈単複〉二種によって六つの形態に変化するのですから、文字どおり煩瑣にして複雑、習得は並大抵のことではありません。むしろ、そこに一定の規則があるならば、まだしも救われるのですが、規則に従わぬ臍曲^{へそまが}がりの不規則変化動詞などという代物があり、しかも常用される動詞に限りて不規則変化が少なくない^{しちう}と来ているのですから、よほどの根気と時間に恵まれなければ、とても付き合いきれないでしょう。ドイツ語やイタリア語などの動詞も似たような複雑さを示します。それに比べれば、屈折変化が大幅に衰えた英語の動詞のほうが遙かに始末がよく、いわゆる三単現、すなわち三人称・単数・現在の場合に〈め〉を付ける程度。一般に〈過去形〉も〈過去分詞〉も〈め〉を加えればよく、また、独立した活用の〈未来形〉は存在せず、助動詞〈will, shall〉を添えて未来を表す。なるほど国際語となるだけあって、英語の動詞は、屈折変化が

単純化されており、学習しやすいことはたしかでしょう。言うまでもなく、英語にも多数の不規則変化動詞があり、仮定法つまり反実仮想^{じふじつたさう}法もあります。

では、漢文の動詞は、どうでしょうか。日本人は漢字をあまりに見慣れていますので、ほとんど意識していないでしょうが、漢文の動詞は、まったく語形変化を起こしません。〈人称〉や〈単複〉によって語形が変わらず、時制による語形変化も一切なし。時制がない以上、動作が〈完了〉か〈未完了〉かも不明ですし、そもそも〈現在分詞〉〈過去分詞〉など存在しません。敢えて言うならば、動詞は常に〈不定詞〉のごとき姿で現れ、自動詞と他動詞の区別もなく、あまつさえ能動態と受動態の区別すらないので。まずは「破」を例とすれば――

62 并^{セテ}力^カ西^{カハバ}向^{マツ}、秦^{シン}必^{カナラ}破^{ヤブ}矣^ナ。〔《十八史略》卷一「春秋戦国」趙〕

力を并せて西に向かえば、秦必ず破れん。

63 国破^{クニヤブ}山河在^{カハバアリ}。〔《唐》杜甫「春望」詩〕

国破れて山河在り。

64 齊^セ因^ヨ乘^カ勝^カ、尽^{ツキ}破^{ヤブ}三^{さん}其^し軍^{ぐん}。〔《史記》孫子呉起列伝〕

齊因りて勝ちに乘じて尽く其の軍を破る。

62の「破」は、「壊滅する」意の自動詞で〈未完了〉。63の「破」は、「荒廃する」意の自動詞で〈完了〉。64の「破」は、「撃破する」意の他動詞で〈完了〉です。自動詞と他動詞の区別は、目的語を伴うか否かで判断するしかありません。62・63のように目的語がなければ自動詞、64のごとく目的語「其軍」を伴っていれば他動詞と捉えることとなります。つまり、漢文の自動詞・他動詞は、結果として区別されるだけであり、

もともと動詞ごとに自動詞か他動詞かが決まっているわけではないのです。英語ならば、同じく「到着する」意でも、〈arrive〉は自動詞、〈reach〉は他動詞と覚え、〈We arrived at the hotel last night.〉と〈We reached the hotel last night.〉のように、〔自動詞＋前置詞＋名詞〕と〔他動詞＋名詞（＝目的語）〕という文法形式の差異に注意を払うでしょう。けれども、漢文では、自動詞と他動詞は融通無碍、後続の名詞とのあいだに前置詞が介入するか否かは、時と場合によるのでしょうかいようがありません。今度は動詞「志」と名詞「学」との結合を例にしてみます。

65 吾十有五 而志_ニ於_ス学_ニ。〔『論語』為政〕

吾_{われ}十_{じふ}有_{いう}五_ごにして学_{がく}に志_{こころざ}す。

66 因_{リテ}令_ム下_{シテ}生_{ハシ} 斥_シ棄_テ百_{ハク}慮_{リョ} 以_テ志_シ学_{ガク}。〔唐〕白行簡『李娃伝』

因_よりて生_{せい}をして百_{ひゃく}慮_{りょ}を斥_{はき}棄_りして学_{がく}に志_{こころざ}さしむ。

65では「志」と「学」のあいだに前置詞「於」が入っていますが、66の「志」と「学」は直結しています。前置詞「於」の有無に着目すれば、形式上、65の「志」は自動詞、66の「志」は他動詞となるでしょう。けれども、『論語』の一句として有名な65の「志於学」が典になり、「志」と「学」が熟合して66のような「志学」という言い回しのできたのですから、そもそも「志」は自他両様の動詞、すなわち自動詞と他動詞の区別はなかったと考えてよいでしょう。事実、古代の文献にも「志_レ義_ぎ」_{義に志す}（『礼記』楽記）のような用例があるのですから。

日本語には「集まる／集む」・「崩る／崩す」・「通る／通す」・「流る／流す」・「上る／上す」・「巡る／巡らす」のような自動詞と他動詞の対立が

少なからず見受けられますので、訓読にさいしては基本的に自動詞と他動詞を区別する必要が生じます。ただし、漢文の動詞が自・他の両者を兼ねる以上、つまり自・他の区別が明確でない以上、場合によっては自動詞とも他動詞とも解釈できることがあります。一例だけ挙げてみましょう。

67 三年_{ニシテ} 有_レ成_成。〔『論語』子路〕

問題となるのは、動詞「成」の訓読です。漢文としては、あくまで「成」と記してあるだけですが、これを自動詞と考えるのか、他動詞と解するのか？ 一見、「成」に目的語がないので、自動詞「成る」に読みたくなりますが、諸氏の訓読を見てみると――

- ・ 吉田賢抗 「三年_{さんねん}にして成_なること有_あらん」
- ・ 金谷治 「三年_{さんねん}にして成_なすこと有_あらん」
- ・ 宮崎市定 「三年_{さんねん}にして成_なるあらん」
- ・ 吉川幸次郎 「三年_{さんねん}にして成_なる有_あらん」
- ・ 加地伸行 「三年_{さんねん}ならば成_なる有_あらん」⁽²⁾

表記の相違まで含めれば、まさに五氏五様。四氏が自動詞「成る」に読んでいますが、金谷氏だけは他動詞「成す」で訓読しています。こうした揺れが生じるのも、「成」が自動詞なのか他動詞なのか、不分明だからにほかなりません。面白いのは、吉田氏が「有成」二字の語釈を「功を成し遂げること」⁽³⁾と記している点です。この「功を成す」を訓読に持ち込めば、他動詞「成す」そのままに「成すこと有らん」となりそ

うなものです、実際は「成ること有らん」。また、それとは逆に、「有成」を「立派にできあがる」と自動詞「成る」らしく訳している金谷氏の訓読が「成すこと有らん」なのです。もはや「成」が自動詞か他動詞かを論じること自体が無意味なのは明らかでしょう。何かが「成就する」意味で自動詞「成る」に読もうと、何かを「達成する」意味で他動詞「成す」に読もうと、どちらでも差し支えないのです。もちろん、動詞「有」の目的語（意味上は主語）になっているので、文法上、動詞「成」は、英語に謂う不定詞の名詞用法のようなものですが。

さらに、漢文の動詞に能動態と受動態の区別がないことも確認しておきましょう。動詞「用」を例とします。

68 苟^{シクモ}有用^{ラバ}我者^ハ、期月^ノ而已^ニ可也。^{（『論語』子路）}

苟しくも我を用ゐる者有らば、期月のみにして可なり。

69 〔蘇秦〕游^シ說^{シテ}秦^ニ惠王^ノ、不^レ用^キ。^{（『十八史略』卷一「春秋戦国」趙）}
〔蘇秦〕秦の恵王に游説して、用ゐられず。

68は、右に掲げた67の上文です。この「用」は、「我」を目的語とする能動態の他動詞。それに対し、69の「用」は、何ら受身の標識なしにそのまま受動態となります。いわゆる「文脈からの受身」にはかなりません。要するに、一つの動詞が能動態にも受動態にもなるのですから、漢文の動詞にはもともと態の区別もないと考えてよいでしょう。

さて、ここまで漢文の動詞の「無い無い尽くし」ぶりを観察してきました。時制について何も記していない点に疑問を抱く向きがあるかもしれませんが、漢文には時制が一切ありませんので、説明しようにも説明の方法がないのが実情です。唯一、英語の仮定法すなわち反実仮想法の

雰囲気を漂わせるのが動詞「微」でしょう。

70 微^{カリセバ}管仲^ニ、吾其被^レ髮^ヲ左^ニ衽^ニ矣。^{（『論語』憲問）}

管仲微かりせば、吾其れ髪を被り衽を左にせん。

71 微^{カリセバ}斯人^ニ、吾誰^ニ与^ニ婦^ニ？^{（『宋』范仲淹「岳陽樓記」）}

斯の人微かりせば、吾誰にか婦せん？

70「微管仲」は「管仲は過去に実在した人物だが、もしその」管仲がいなかったとしたら」を意味する反実仮想、71「微斯人」も「君子は古代に実在したけれども、もし」このような君子がいなかったならば」の意を成す反実仮想で、いずれの「微」も英語ならば仮定法過去完了の表現〈If it had not been for〉に相当し、好みとあらば〈But for〉や〈Without〉に書き換えても差し支えありません。実際、70「微管仲」の英訳を見ると、人名「管仲」のローマ字化方式の相違を除けば、左のように五者四様の訳文になっています。

- But for Kwan Chung... / J. Legge
- Had it not been for Kuan Chung... / D. C. Lau
- But for Guan Zhong... / C. Huang
- Without Guan Zhong... / B. Watson
- If not for Guan Zhong... / A. Chin

前置詞〈句〉の〈But for〉〈Without〉のほか、基本形〈If it had not been for〉の〈If〉を省いた倒置形〈Had it not been for〉や省略形〈If not for〉など、さながら大学入試英語の書き換え問題のような景色です

が、いずれも主節は〈we would [should, might well] (now) be wearing our hair loose [down, unbound]...〉の過去時制を用いた帰結節になっています。「微」に仮定法すなわち反実仮想の用法があることは明らかでしょう。けれども、70「微」に仮定法過去や仮定法過去完了を表す標識は何もなく、主節「吾其被髮左衽矣」にも時制の目印は一切ありません。「其……矣」は、確信のこもった強い語気を表しこそすれ、時制の概念とは無縁です。

もっとも、右のような時制に関する論議は、強いて英語を比較の対象として持ち出したがゆえの話にすぎず、ろくろく時制を顧慮しない日本語の話者たる我々の目には虚しく映るのも事実でしょう。実際、我々日本人は、漢文を訓読するとき、時制なぞ気にかけていません。それを象徴するのが「子曰く」で馴染み深い「曰」ではないかと思われれます。

日本人が「曰」について議論を交わすとなれば、送り仮名を「曰」とするか「曰」とするか、単に「いはく」では孔子に対する敬意を欠くから「子のたまはく」と読むべきで、読み方によって「曰」と「曰」のごとく送り仮名を区別すべきではないか——そのような議論ばかりかと思受けまます。ありていに言って、どちらも瑣末なことこのうえない問題でしょう。「曰」にせよ「曰」にせよ、結果として「いはく」と読むことに変わりはないのでしたら、好みに応じて「曰」または「曰」と読み仮名を付けるだけで事は解決するはずです。また、送り仮名の違いによって「曰」と「曰」を区別しようとするのは、「自」と「自」の判別と似たような話で、「自」と読む人が出てくるのを防げないのと同じく、「曰」と読むのを妨げることはできません。いっそのこと、江戸時代に用いられていた「自」「自」のごとき迎え仮名の知恵を活かして、「曰」「曰」とでもするほうが遙かに効率的ではないで

しょうか。それを嫌うなら、やはり「曰」「曰」のように読み仮名を付けてしまうのが最も確実な方法です。

確認しておきたいのは、右のような議論が、私の提案する賢しらをも含め、まったく時制と無関係な性質の話だということです。この「子曰」についても英訳を試みましょう。

72子曰

・The Master said / J. Legge, D. C. Lau, C. Huang, B. Watson, A. Chin⁽⁹⁾

前に名を挙げた英訳者の五人が五人とも同一の訳文です。「子」を〈The Master〉と訳している点も面白いのですが、ここで注目してほしいのは、五人がそろって「曰」に過去形〈said〉を充てていることです。孔子(552 B.C.-479 B.C.)は過去の人物なのだから、その発話行為「曰」は過去形で記す——これが時制を持つ英語の常識でしょう。日本人も、西洋語の翻訳となれば、時制に付き合うことにやぶさかではない。たとえば、ドイツの哲学者ニーチェ F. W. Nietzsche (1844-1900) の著作 *Also sprach Zarathustra* を『ツァラトゥストラはかく語りき』と訳したりします。動詞〈sprechen〉の直説法過去〈sprach〉に忠たるべく、過去の助動詞「き」を持ち出すわけです。

ところが、事が漢文となると、誰も動詞の時制なぞ気にしません。「曰」を「曰」(曰ひき)と過去に読んだりしないのです。それもそのはず、漢文の動詞には時制が存在せず、日本語の動詞にも基本的に時制が存在しないからです。せいぜい51「事へん」・55「取らん」・62「破れん」・67「有らん」・70「左にせん」・71「帰せん」のように、未完了の

動作について推量の助動詞「む」が撥音化した「ん」を用いる程度。完了している動作だからといって、完了の助動詞「り」「たり」を添えるとは限りません。ほとんど現在形で押し通して読んでいるのが実態です。実際、積極的に完了の表現を用いて訓読するのは、次の73のように完了の助動詞を含む読み方が固定化している名句や、74のごとく漢文の典型的な完了表現「已……矣」が現れるときくらいでしょう。

73 過^{ギタル}不^レ及^ホ。〔論語〕先進

過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし。

*完了の助動詞「たり」連体形

74 道^{ミチ}之^ハ不^レ行^ハ、已^ニ知^レ之^ヲ矣。〔論語〕微子

道の行はれざるは、已に之を知れり。

*完了の助動詞「り」終止形

では、過去のことを現在時制で読む漢文訓読の一般的な読み方は、どのように捉えればよいのでしょうか。西洋語の文法に照らせば、過去の事象を活写するために用いる現在時制、すなわち歴史的現在 *historic (al) present*こそが漢文訓読における暗黙の大前提だと見なせるでしょう。とはいえ、歴史的現在を意識して漢文を訓読している向きは、ほぼ皆無と言ってよいのではないでしょうか。我々が動詞について気遣うのは、適切な音読み・訓読みの選択はもちろんのこと、その読みにふさわしく動詞を活用させることです。漢文の動詞には活用がありませんが、日本語の動詞は六種の活用形（未然・連用・終止・連体・已然・命令）を持っているので、どうしても活用語尾を送り仮名として付け加える必要があるからです。

けれども、考えてみれば、この「付け加える必要がある」は、訓読にとって非常に有利に働いたのではないのでしょうか。なぜなら、裏返して言うと、「付け加えさえすればすむ」ともなるからです。もし、これとは反対の作業、つまり「取り除く必要がある」、または別種の作業、すなわち「書き換える必要がある」であったならば、作業が錯雑し、結果として甚だ読みづらい事態になっただろうと想われます。

漢文について、動詞「知」を例とすれば――

75 不^レ知^ニ其^ノ仁^ニ也。〔論語〕公治長

其の仁を知らざるなり。 *未然形

76 是^レ知^ニ其^ノ不^レ可^一而^レ為^ニ之^ヲ者^ヲ与。〔論語〕憲問

是れ其の不可なるを知りて之を為す者か。 *連用形

77 聞^キ一^ヲ以^テ知^レ十。〔論語〕公治長

一を聞きて以て十を知る。 *終止形

78 知^ル之^ヲ者^ハ不^レ如^ク好^ム之^ヲ者。〔論語〕雍也

之を知る者は之を好む者に如かず。 *連体形

79 知^シ其^ノ一^ヲ、未^ダ知^シ其^ノ二。〔史記〕高祖本紀

其の一を知れども、未だ其の二を知らず。 *已然形

漢文の動詞「知」は何も変化していませんが、それが日本語の生理に従って活用五形に読み分けられています。命令形が見当たらない点に不満の声が挙がるかもしれません、不勉強にして「知」を命令形に読む例を持ち合わせていないため、類義の動詞「識」の命令形「識せ」で代用しておきましょう。孔子の有名な言葉です。

80 小子識^セ之^ヲ。苛政^ハ猛^{ナル}於^ニ虎^{ヨリ}也。『礼記』檀弓下

小子^{こし}之^{これ}を識^しせ。苛政^{かせい}は虎^こよりも猛^{まう}なるなり。 *命令形

前に漢文の動詞は〈不定詞〉のようなものと記しましたが、この「不定」とは、日本語の立場から見れば、いずれの活用形なのかを定めることができない、逆に言えば、すべての活用形に対して開かれているという意味です。英語の〈不定詞〉は、たとえば〈to realize〉と記しただけでは主語が定まらないから〈不定詞〉と呼ぶのでしようが。

言うまでもなく、漢文の「知」を数種の活用形に変化させることができるのは、「知」を「知る」と訓ずる習慣が成り立っていればこそ話です。いわば「知」によって、日本語の「しる」という動詞の概念が固定されているため、その「知」を語幹のごとく利用し、そこに活用語尾を付け加えるだけで日本語に変換できるわけです。

英語では、そうはゆきません。〈know〉を〈knowる〉または〈knowす〉と読む習慣はないのです。しかも、〈know〉が変化して〈knew〉〈known〉などとなれば、〈knew〉は〈know〉の過去形、〈known〉は〈know〉の過去分詞という具合に、それぞれ原形〈know〉を基準として理解することになりますが、万一の誤解を防ぐべく、原形〈know〉を目に見えるようにするには、どうしたらよいのか。最低でも〈knew〉のごとき書き換えや〈known〉のような削り取りの作業が必要となるでしょう。その他の動詞についても、〈He founds〉とあれば〈founds〉のごとく削除したり、〈He found〉と来たら〈found〉のように書き改めたりしなければ、原形〈found〉や〈find〉が浮かび上がってきません。なかんづく〈go〉の過去形〈went〉は質^ちの悪い過去形で、どういじくりまわしても〈go〉を抽出することは不可能、一語全体を

〈#ent〉と書き換えるしかないでしょう。もとはと言えば、動詞〈wend〉の過去形〈went〉が〈go〉の過去形に転用されたものなので、すから、〈go〉と似ても似つかぬ姿形をしているのは当然でもあります。

こうした綴り字の削除や変更を繰り返したとすれば、作業用の字句が英文のそこかしこに飛び散り、きわめて読みにくい版面になってしまいうでしょう。したがって、一般に我々は、そのような事態を避けるべく、前もって〈knew〉〈went〉がそれぞれ〈know〉〈go〉の過去形だくらの基本知識は身につけておき、せいぜい〈He found〉の〈found〉が〈find〉の過去形であることをメモ書きする程度ですませるわけです。もしこの〈found〉の原形が〈found〉だとしたら、現在形は〈He founds〉、過去形は〈He founded〉となるはずですから。

ところが、漢文となると、こうした懸念はまったく生ずる余地がありません。すべてが付け加えるだけですむからです。たしかに、漢字の右下に片仮名の小字で記される送り仮名は、見た目にはうるさいかもしれない。しかし、ちょっと仮名を添えるだけで日本語に変換できるとは、改めて驚くに値する芸当ではないでしょうか。むしろ、それは、日本語が中国古典から漢字を豊富に取り入れ、その読み方がおおむね決まってい、意味が了解できるからこそ可能なわけです。さらに踏み込んで言えば、孤立語の漢文Ⅱ古典中国語を膠着語の日本語に変換するには、漢文の単語に日本語の膠着要素さえ加えればよい、との話にもなるでしょう。動詞が時制・人称・単複などによってさまざまに姿形を変える屈折語では、そう容易には事が進みません。漢文訓読における動詞の処理は、「漢文（孤立語）＋膠着要素Ⅱ日本語（膠着語）」という等式を最も如実に感じさせる現象ではないかと思えます。

⑥ 助動詞

漢文の助動詞は、英語と同じく、動詞に前置されます。ただし、訓読に用いる日本語は、助動詞ごとに品詞がばらつき、統一されていません。英語〈can〉に相当する「可」「能」「得」について一つずつ確認してみます。

81 民^{ハシ}可^ム使^ラ由^ニ之、不^レ可^ム使^ラ知^ラ之。^{〔論語〕}泰伯

民は之に由らしむべし、之を知らしむべからず。

二つの「可」が使役動詞「使」に冠せられています。この助動詞「可」は、日本語でも助動詞「べし」を充てて訓じますので、返り点を打って動詞「使」の次に「べし」と読むこととなります。使役動詞「使」に使役の助動詞「しむ」を充てるのは、漢文訓読の定石です。

これに対し、「能」は少し事情が異なります。肯定の場合は、「能く」と副詞に読みますが、打消の助動詞「ず」を以て訓ずる否定辞が被せられた場合は、動詞「あたふ」を充て、それを未然形に活用させて「能はず」と訓読します。

82 唯^タ仁^ニ者^ハ能^ク好^ム人^ヲ能^ク惡^ム人^ヲ。^{〔論語〕}里仁

唯だ仁者のみ能く人を好み能く人を惡む。

83 似^タ不^レ能^ハ言^フ者^ニ。^{〔論語〕}郷党

言ふこと能はざる者に似たり。

副詞「能く」は、修飾語として下文の動詞に掛かりますので、返り点には必要ありませんが、「能はず」と訓ずるときは、「能」の上下に返り点が付きます。両者が同時に用いられた例を左に挙げておきましょう。前掲51の全文で、打消の助動詞「ず」を含む再読文字「未」が現れています。

84 未^ダ能^ハ事^レ人^ヲ焉^ニ能^ハ事^レ鬼^ニ!?^{〔論語〕}先進

未だ人に事ふること能はず、焉くんぞ能く鬼に事へん!?

一方、「得」は、あっさり動詞「得」に読んでしまえます。日本語としては動詞ですが、漢文としてはあくまで助動詞である点に注意してください。

85 得^バ見^ル有^ル恒^ニ者^ヲ斯^チ可^{ナリ}矣^ハ。^{〔論語〕}述而

恒有る者を見るを得ば、斯ち可なり。

86 不^レ得^ニ与^レ之^ヲ言^フ。^{〔論語〕}微子

之と言ふことを得ず。

85 「可」は、補語ですので、「べし」とは読まず、「か」と音読みする習慣です。86は、助動詞「得」と動詞「言」のあいだに、前置詞「与」+名詞「之」||副詞句「与之」が動詞「言」の修飾語として割り込んでいます。

右の「可」「能」「得」は、いずれも英語〈can〉と同じ「〜できる」意味ですが、敢えて区別すれば、「可」には「周囲の状況から許されて」〜できる、「能」には「能力があつて」〜できる、「得」には

「(機会に恵まれて) 〽できる」という意味合いがあります。さしたる差もなく用いられる場合がありますが、基本として知っておくに越したことはないでしょう。

このほか、再読文字「将」「且」「当」「応」「宜」「須」などもすべて助動詞です。それぞれ一つずつ例文を挙げておきましょう。いずれも動詞に上接していることを確認してください。

87 不^レ知^二老^一之^レ将^ニ至^一云^レ爾^カ。(『論語』述而)

老いの将に至らんとするを知らずと爾か云ふ。

88 引^{キテ}酒^ヲ且^ニ飲^ニ之^ヲ。(『戦国策』齊二)

酒を引きて且に之を飲まんとす。

89 蒼天已死^ニ、黄天当^ニ立^ツ。(『後漢書』皇甫嵩伝)

蒼天已に死すれば、黄天当に立つべし。

90 応^ニ知^二故郷^一事^ヲ。(『唐』王維「雑詩」)

応に故郷の事を知るべし。

91 惟^ダ仁者^ノ宜^ニ在^二高位^一。(『孟子』離婁上)

惟だ仁者のみ宜しく高位に在るべし。

92 男兒須^ニ讀^二五車書^一。(『唐』杜甫「柏学士茅屋」詩)

男兒須らく五車の書を読むべし。

英語の助動詞または準助動詞で言えば、87「将」・88「且」は〈will, be going [about] to〉に、89「当」・90「応」・91「宜」は〈should, ought to〉に、92「須」は〈must, have to〉に相当します。再読文字と言ふと、その名称につられ、つい二度にわたって読むことにはばかり気を

取られがちですが、右の六つの再読文字は、文法上、すべて助動詞と理解しておくことが肝腎です。再読文字の訓読そのものは難しくありません。初読(右の読み)から入り、下接する動詞から再読(左の読み)に返すだけです。もっとも、裏を返せば、下方から再読に返ってくる以上、再読文字は必ず返り点を必要とします。再読文字に返り点が付いていなければ、ただちにその返り点は誤りだと断定してよいでしょう。

⑦ 前置詞

前置詞については、すでに④副詞の「附」前置詞で説明しました。

「前置詞+名詞」副詞句が中核動詞の上方にあれば前位副詞句 modifier、下方にあれば後位副詞句 qualifier という寸法でした。ここでは、前置詞が伴うはずの名詞の省略、および前置詞と名詞の倒置について観察してみましょう。

左に掲げるのは、古代、遊説に出かけた蘇秦が成功することなく困窮して家にもどってきたときの妻と兄嫁の冷たい態度を描写した一文です。

93 妻不^レ下^ニ機^ヲ、嫂不^ニ為^ニ炊^一。(『十八史略』卷一「春秋戦国」趙)

妻は機を下らず、嫂は為に炊がず。

蘇秦が久しぶりに帰宅したものの、落ちぶれて帰ってきたため、妻は機織り台から下りて出迎えようとせず、嫂も食事を作ろうとしなかったというわけです。この「為」は、「為^ニ蘇秦^一」(蘇秦の為に)の名詞「蘇秦」が省かれ、前置詞「為」だけが残ったものと考えてよいでしょう。これを、単独で用いられた前置詞という意味で、仮に単用前置詞と

名づけておきます。誰の「為に」であるかは文脈から明らかなため、「蘇秦」の二字を削って上下それぞれ四字句に仕立て、律動感を整えた一文かと思われます。

次は、単用前置詞「以」の一文です。

94 (李) 広出^デ獵^ニ、見^シ草中^ノ石^ヲ、以^テ為^シ虎而射^ル之^ヲ。(『史記』李將軍列伝)
(李) 広獵に出で、草中の石を見、以て虎と為して之を射る。

この「以」も、「以^テ石為^シ虎」の名詞「石」が省略され、前置詞「以」だけが取り残されたものと見なして差し支えありません。「その石をてつきり虎だと思い込んで」との意味です。

要するに、単用前置詞「為」「以」は、そのまま「為に」「以て」と訓じておけばよく、訓読の負担にはなりません。

ただし、同じく前置詞でも、「与」は少し面倒です。前置詞「与」には格助詞「と」を充てて「与」と読むのですが、単用されたとき、「与」と読むだけですませると、甚だ奇妙な日本語になってしまいます。実例を見てみると――

95 与^ニ中国^ニ同^シ俗^ヲ。(『漢書』張騫列伝)
中国と俗を同じうす。

前置詞「与」が冠せられた名詞「中国」を単に取り除くと、「と俗を同じうす」となり、まともな日本語には聞こえませんが、「ために」「もつて」はそれぞれ文節を成しますが、格助詞「と」のみでは文節を形成できないのが大きな理由でしょう。

では、どうするか？ ここで援用されるのが副詞「与」の訓読「与に」です。まずは「与」が副詞に用いられた次の例を見てください。

96 可^キニ与^ニ適^シ道^ニ、未^ダレ可^カニ与^ニ立^ツ。(『論語』子罕)
与に道に適くべきも、未だ与に立つべからず。

二つの副詞「与に」が見えます。読んで字のごとく「ともに」すなわち「一緒に」の意に解すれば、一応は意味が通じるでしょう。この「ともに」ならば、文節として独立できますので、単用前置詞「与」の訓読には打ってつけとなるわけです。

97 寡婦^ハ之子^ニ、非^ザレ有^ル見^ル焉^ニ、弗^ズニ与^ニ為^ラ友^ト。(『礼記』曲礼上)

*弗^レ不^レ。

寡婦の子は、見るべき有るに非ざれば、与に友と為らず。

文意は「寡婦の息子は、世間に知られるような才能を示すことがなければ、交際の相手にはしない」となります。現代の我々の耳には、許し難い偏見に響きますが、今は「与」にだけ注目してください。この「与」が単用前置詞で、事実上、上方に記された「寡婦之子」を伴う「与^ニ寡婦之子^ニ」(寡婦の子と)と同義であることは明らかだと思いますとなれば、ひるがえて96の「与に」も、字義どおり「ともに」と解するのは拙く、何らかの名詞が省かれた単用前置詞ではないかという気がしてくるでしょう。実際、96の上文は、次のようになっています。

98 子曰^ク「可^キニ与^ニ共^ニ学^ブ、未^ダレ可^カニ与^ニ適^シ道^ニ」。(『論語』子罕)

子曰く「与に共に学ぶべきも、未だ与に道に適くべからず。（以下96に続く）」

孔子の発言の冒頭で、いきなり「与に共に」と出てきますので、一見「与共」は連文（同義または類義の字を重ねた熟語）のように映りますが、そうではありません。「已」も「甚」も「はなはだ」であるいは「業」も「已」も「すでに」などとは違い、「与」共とは読めないのです。では、同じ読みを重ねた「与に共に」の実体は何かと言えば、やはり単用前置詞「与」＋副詞「共」と考えるのが合理的でしょう。つまり、この98では、前置詞「与」に下接すべき名詞が明記されてはいないものの、たとえば「与其人共」（其の人と共に）のごとく、省略されたと思われる言葉を適宜に補って理解するのが正鵠を射ていることになります。96の説明で「一応は意味が通じる」と薄暗い言い方をしたのは、そのような事情があるからにはかなりません。「与」は、日本語としては副詞であっても、漢文としてはあくまで単用前置詞だということです。要するに、単用前置詞「与」を副詞のように「与」と読むのは、一に訓読の便宜による話であり、裏返して言えば、訓読において発揮された品詞転換の知恵だと捉えることもできるでしょう。

一方、前置詞が下接するはずの名詞と倒置され、（名詞＋前置詞）という語順になることもあります。その代表格が、英語ならば「with」で始まる疑問詞との倒置でしょう。左の一例を見てください。

99 晨門曰「奚自？」。子路曰「自孔氏。」（『論語』憲問）
晨門曰く「奚れよりする？」と。子路曰く「孔氏よりす」と。

晨門（門番）が「どちらからお出ですか？」と尋ねたのに対し、孔子の弟子の子路が「孔家からだ」と答えたという簡単な会話です。「奚」は、「奚」（奚く）と訓じても差し支えありません。

問題は、二つの前置詞「自」と名詞の順序です。純然たる名詞「孔氏」の場合は、その名のとおり、「自孔氏」のごとく名詞に前置されていますが、疑問代名詞「奚」に対しては、「奚自」のように後置され、日本語と同じ語順になっています。これは例文50の説明中に記したごとく、英語の「*Where*」疑問詞が文の前方に出ようとするのと同じ性質の現象にほかなりません。

それにしても、前置詞「自」をサ変動詞化して「自」（自りす）と訓読してのける知恵には驚かされます。動詞「来」が記されていれば、例文07（前号一二頁下段）の「自遠方来」と同じ要領で、「奚自来」または「自孔氏来」と読めばすみますが、「来」が見えないからといって、前置詞の読み「より」そのままでは、「奚れより？」「孔氏より」となってしまう、日本語として据わりの悪いことこのうえない。そこで、59のように前置詞「以」を後位副詞句で「以てす」と読むのと同じく、「自」も「自りす」とサ変動詞にしてしまうわけです。御都合主義と踏み倒せばそれまでですが、こうした臨機応変の柔軟な品詞転換も漢文訓読を支える重要な技術に数えられるでしょう。

同様の工夫が前置詞「与」や「為」についても発揮されます。

100 子行三軍、則誰与？（『論語』述而）
子三軍を行らば、則ち誰と与にせん？

この「誰与？」も、本来は「与誰行？」（誰と行らん？）に作るべ

きところですが、「誰」が疑問詞のために前置詞「為」と倒置を起こし、上文との重複を避けて動詞「行」が省かれたものです。そのまま「誰と?」(誰と?)では日本語として落ち着かないので、前述のごとく前置詞「与」を「与」(与に)と副詞化し、さらに省略された動詞の代用をも果たすべく「与」(与にす)とサ変動詞化して訓読するのです。

101 非^ズ夫人^ノ之^ニ為^ル而^{シテ}誰^ガ為^ス!? (『論語』先進)

夫^カの人^ノ之^ニ為^ルに働^カするに非^ズして、誰^ガが為^ニにせん!?

前半の「為」については暫く措き、今は後半の「誰為!?」だけに注目してください。これも、やはり「為^ニ誰^ガ働^カ!?」(誰^ガが為^ニに働^カせん!?)の疑問詞「誰」が前置詞「為」と倒置され、上文と重複する動詞「働」が省略された二字です。右に観察してきた「自^リにす」「与^ニにす」と同様の措置が講じられたサ変動詞「為^ニにす」だと考えて差し支えありません。念のため、動詞が省略された結果、前置詞「為^ニに」をサ変動詞化して「為^ニにす」と読む例文をもう一つ掲げておきます。

102 古^ノ之^ハ学者^ヲ為^レ己^ニ、今^ノ之^ハ学者^ヲ為^レ人^ニ。(『論語』憲問)

古^ノの学者^ハは己^ニの為^ニにし、今^ノの学者^ハは人^ニの為^ニにす。

上下それぞれ「為^ニ己^ニ学^ブ」「為^ニ人^ニ学^ブ」の動詞「学」が省かれたため、前置詞を動詞のごとく「為^ニにす」と訓じたものと考えてよいでしょう。ただし、前置詞が名詞と倒置されるのは、もう一つ別の場合もあります。それは、名詞を強調すべく前置詞の上方に移動した結果、単に語順が逆転して「(名詞+前置詞)」となる場合です。

103 君子^ハ義^ヲ以^テ為^ル質^ト、礼^ヲ以^テ行^フ之^ヲ、孫^ヲ以^テ出^ス之^ヲ、信^ヲ以^テ成^ス之^ヲ。

(『論語』衛霊公) *孫^ニ遜^ス。

君子^ハは義^ヲ以^テ質^トと為^スし、礼^ヲ以^テ之^ヲを行^フなひ、孫^ヲ以^テ之^ヲを出^スだし、信^ヲ以^テ之^ヲを成^スす。

四つの前置詞「以」は、それぞれ直前の名詞と倒置されたもので、本来ならば「以^テ義^ヲ」「以^テ礼^ヲ」「以^テ孫^ヲ」「以^テ信^ヲ」の語順となつて然るべきところでしょう。こうした純然たる倒置もあるわけです。

もっとも、「義以^テ」(義^ヲを以^テ)と「以^テ義^ヲ」(義^ヲを以^テ)の読み分け、すなわち格助詞「を」の有無には注意が必要です。漢文訓読は、語順こそが肝腎な孤立語たる古典中国語を相手にするため、勢い語順には敏感にならざるを得ないのです。どのみち意味は同じだからといって、「義以^テ」を「義^ヲ以^テ」(義^ヲを以^テ)と読むことは許されません。

こうした単純な倒置は、前置詞「以」に用例が多い印象ですが、少なくとも『論語』を読むかぎり、とりわけ数詞「一」が現れる文に多用される傾向があるように見受けま

104 一言^ヲ以^テ蔽^フ之^ヲ、曰^ク「思^フ無^ク邪^ナ」。(『論語』為政)

一言^ヲ以^テ之^ヲを蔽^フへば、曰^ク「思^フひ邪^ナ無^クし」と。

105 吾^ガ道^ハ一^ヲ以^テ貫^ス之^ヲ。(『論語』里仁)

吾^ガ道^ハは一^ヲ以^テ之^ヲを貫^スく。

106 一言^ヲ以^テ為^ル知^ト、一言^ヲ以^テ為^ル不知^ト。(『論語』堯曰)

一言^ヲ以^テ知^トと為^スし、一言^ヲ以^テ不知^トと為^スす。

104・106の「一言以」は「以一言」(一言を以て)の倒置、105の「一以」は「以一」(一を以て)の倒置と見なせます。数詞「一」は、しばしば「わずかに一つ」という限定の意味合いを持ち、自ずから強調の語感を帯びるため、前置詞「以」のまえに置かれることが好まれるのかもしれない。

以上、大ざっぱながら、伴うはずの名詞が省略された単用前置詞、および前置詞と名詞との倒置について検討してみました。なかんづく、柔軟な品詞転換は、漢文訓読を成り立たせるうえで欠くべからざる技術かと思えます。

⑧ 接統詞

接統詞は、等位接統詞と従属接統詞に分かれますが、それほど難しくありません。少し面倒なのは、等位接統詞「与」と、条件・仮定を表す従属接統詞「使」の訓読だけです。

i 等位接統詞

等位接統詞の代表は、英語の〈and〉に等しい「及」「且」「而」「与」〈or〉に相当する「或」「若」などです。いずれも並列要素のあいだに置くだけですから、語順そのものは、日本語の「AとB」「AまたはB」と同じ感覚です。

まずは〈and〉に当たる接統詞「及」「且」「而」「与」を観察してみよう。

107 (田忌) 与王及諸公子逐射千金。(『史記』孫子列伝)

(田忌) 王及び諸公子と千金を逐射す。

108 邦有_レ道、貧_レ且_レ賤_レ焉、恥也。邦無_レ道、富_レ且_レ貴_レ焉、恥也。

(『論語』泰伯)

邦に道有るに、貧しく且つ賤しきは、恥なり。邦に道無きに、富

み且つ貴きは、恥なり。

109 子温_レ而_レ厲_レ威_レ而不_レ猛_レ恭_レ而_レ安。(『論語』述而)

子は温にして厲し、威にして猛からず、恭にして安し。

110 富_レ与_レ貴_レ、是_レ人_レ之_レ所欲_レ也。……貧_レ与_レ賤_レ、是_レ人_レ之_レ所_レ惡_レ也。

(『論語』里仁)

富と貴きとは、是れ人の欲する所なり。……貧しきと賤しきとは、是れ人の惡む所なり。

場合によっては、二種の接統詞が組み合わさって現れます。「而」と「且」が同時に用いられた例を挙げておきましょう。

111 不義_レ而_レ富_レ且_レ貴_レ、於_レ我_レ如_レ浮雲。(『論語』述而)

不義にして富み且つ貴きは、我に於いて浮雲の如し。

ただし、同じく〈and〉の意味でも、並列としては「而」のほうが「且」よりも大きな枠組みを表している点には注意が必要です。まず大きく「而」によって「不義」と「富且貴」が並列され、さらに小さく「且」によって「富」と「貴」が並列されていると考えてよいでしょう。数式もどきに示せば、「不義」「而」「富」「且」「貴」となります。

108・111の「貧且賤」「富且貴」と110の「富与貴」「貧与賤」を照らし

合わせれば、一目瞭然、「且」と「与」が同一の接続機能を果たしていることが理解できると思います。

けれども、「及」「且」「而」とは異なり、接続詞「与」の訓読だけが110「富与^ト貴^キ」「貧与^シ賤^シ」のごとく返り点を要求することは銘記しておかねばなりません。現代日本語ならば、「A」と「B」の並列は、ただ「AとB」と言えばよい。漢文も「A与^トB」と書くのですから、「与」に「と」を充てて、「A与^トB」のように返り点ナシで済ませてしまえば、手間もかからず、合理的に映るでしょう。しかし、忘れてはなりません、漢文訓読に用いる日本語は、いわゆる古文すなわち古典日本語です。並列を表す「と」は、もともと「AとBと」のごとく並列要素の一つひとつに付ける格助詞でした。これを「AとB」のように一つの「と」だけで結ぶことが公的に認められたのは、新しいもよいところ、なんと明治三十八年（一九〇五）十二月二日付《官報》所載の文部省告示「文法上許容すべき事項」⁽¹²⁾においてでした。漢文訓読は、こうした新参者の許容事項にかかわらずことなく、並列の格助詞「と」の古式に則って「AとBと」流の読み方を維持しているわけです。残る問題は、「AとBと」の二つの「と」を漢文「A与^トB」に対してどのように割り振るかですが、110に見られる「富与^ト貴^キ」「貧与^シ賤^シ」を一般形で書けば、次のようになります。

112 A与^トB || AとBと

一つめの「と」はAの送り仮名とし、二つめの「と」はBから返って「与」の読みとします。「A与^トB」と訓ずることにすれば、返り点は不要、余計な面倒ナシで済むのですが、おそらくは57で見たような前置詞

「与」の用法が念頭にあったからでしょう、接続詞「与」についても、下接する名詞から返って読む方式を採用したものと思われれます。

この接続詞「与」の読み方は、特に注意を要するので、さらに用例を掲げておきます。

113 若^キ二聖与^ト仁^ニ、則^チ吾豈敢^ニ?!?（『論語』述而）

聖と仁との若きは、則ち吾豈に敢へてせんや!?

114 弑^セ父与^ト君^ニ、亦不^{タル}從^ハ也。（『論語』先進）

父と君とを弑せば、亦た従はざるなり。

115 楚人有^ニ下^リ鬻^グ矛与^ト楯者^ニ。（『韓非子』難一）

楚人に矛と楯とを鬻ぐ者有り。

116 客亦知^ニ夫水与^ト月乎^ニ?（宋）蘇軾「前赤壁賦」

客も亦た夫の水と月とを知るか?

訓読「聖^トと仁^ニ」「父^トと君^ニ」「矛^トと楯^ニ」「水^トと月^ニ」の定型を目に焼き付けてください。もちろん、接続詞「与」の求める返り点は、いつでもレ点とは限りません。「A与^トB」のBが二字以上であれば、ふつう一二点を使うことになります。

117 夫子之言^ヲ性^ニ与^ト天道^ニ、不^ルレ可^カ得^テ而聞^ク也。（『論語』公冶長）

夫子の性と天道とを言ふは、得て聞くべからざるなり。

118 唯^ダ上知^ニ与^ト下愚^ニ不^レ移^フ。（『論語』陽貨）

唯だ上知と下愚とは移らず。

この二例では「性^ニと天道^ニ」「上知^ニと下愚^ニ」のように一二点が用い

られています。訓読の定型そのものに変わりはありません。112の一般形さえ記憶しておけば宜しく、あとは返り点の付け方が少し異なるだけです。

ただし、この一般形112「A^と与^レB」（AとBと）には、なおも避けて通れぬ問題が二つあります。一つめは、接続詞「与」と前置詞「与」との判別の問題。二つめは、接続詞「与」が記されていない場合の並列句句の処理の問題です。

先ほど、112の説明のなかで、「A^と与^レB」を「A^と与^レB」と訓じ、「A^と与^レB」と読まないのは、57のような前置詞「与」の用法が念頭にあったからではないかと記しましたが、実は、ここに厄介な問題が生じるのです。念のため57を再掲してみましよう。

57 君王^と与^二沛公^一飲^ス。(再掲／『史記』項羽本紀)

*与^二with together with

君王^{くんわう}沛公^{はいこう}と飲^{いん}す。

これは「与」を前置詞と解しての訓読です。けれども、漢文「君王与沛公飲」の「与」を接続詞と理解し、定型「A^と与^レB」に当てはめれば、次のようにも読めるのです。

57' 君王^と与^二沛公^一飲^ス。 *与^二=and

君王^{くんわう}と沛公^{はいこう}と飲^{いん}す。

57の「与^と沛公^と」は前置詞「与」+名詞「沛公」＝副詞句ですから、主語は「君王」の二字だけですが、57'では接続詞「与」が「君王」と

「沛公」を並列しているの、主語は「君王」と「沛公」の二者になります。言い換えれば、57では「君王」のみに重みがかかり、57'では「君王」と「沛公」の両者にほぼ均等な重みがかかることになるのです。念のため、二例の相違が明確になるよう構文分析と日本語訳とを示せば――

57 君王^S与^M沛公^V飲^V。 君王が沛公と一緒に酒を飲んでいいる。
57' 君王^S与^M沛公^V飲^V。 君王と沛公と一緒に酒を飲んでいいる。

果たして「与」は前置詞なのか、それとも接続詞なのか？ 音読すれば、57では「君王」の直後に些少の切れめが入り、57'では「君王与沛公」を一気につなげて読むことになるでしょうから、少なくとも音読者がいづれの解を採っているのかわかる可能性はあるものの、右の限られた字面だけでは、57と57'の是非は判定できません。出典の『史記』項羽本紀を閲読し、周囲の語句や文脈に照らして、始めて57「与」＝接続詞よりも57'「与」＝前置詞のほうに適切だろうとの判断が下せるのです。漢文それ自体に、57と57'を区別する文法上の標識は一切ありません。英語の文法感覚から見れば、「与」一字が前置詞〈with〉と接続詞〈and〉を兼ねるのは信じ難い現象かもしれませんが、考えてみれば〈with〉も〈and〉も要は何かと何かが一緒になることを表すのですから、その「何かと何かが一緒になる」というイメージを「与」が表現するのだと考えれば、それほど不思議に思わずに済むのではないのでしょうか。

察してもらえたとおり、この曖昧さが生じるのは、「A^と与^レB」が主語の位置に記され、A・Bがいずれも人物を指すときです。110「富与貴」

「貧与賤」または113「聖与仁」のようにA・Bが人物でない場合や、114「父与君」・115「矛与楯」・116「水与月」などのごとくA・Bが動詞の目的語になった場合には、「与」が接続詞であることは明白で、前置詞と解する余地はありません。

「与」が接続詞なのか前置詞なのか、一瞥しただけでは判別しづらい例を少しだけ補充しておきましょう。

119 籍与江東子弟八千人渡江而西、今無一人還。

〔史記〕項羽本紀 * 籍は項羽の自称。
籍江東の子弟八千人と江を渡りて西せしに、今一人の還るもの無し。

これは項羽が死を覚悟したときの科白の一部です。冒頭は、「与」を接続詞と解し、「籍与江東子弟八千人」（籍と江東の子弟八千人）と読んでも意味は通じるでしょう。しかし、自らが率いて長江の西に進軍した多数の若者をことごとく戦死させてしまい、一人も連れて帰ることができなかったと悔いている内容ですから、自責の念に駆られた科白にふさわしく、主語は籍一人のみ、すなわち「与」は前置詞と理解して、右のごとく訓読し、「私へ籍」は「江東の子弟八千人」と……と解釈するほうが優るかと思われます。

120 顧悦与簡文同年、而髮蚤白。〔世説新語〕言語

顧悦簡文と年を同じうして、髪蚤に白し。

この一文も、下接する「髮蚤白」（髪蚤に白し）が顧悦に関する叙述

ですので、上文の主語は顧悦だけ、つまり「与」を前置詞と解して、右のように「顧悦与簡文」（顧悦簡文と）と訓読し、「顧悦は簡文と……」の意味に取るのが妥当でしょう。

けれども、並列要素に特に軽重の差が見られなければ、「与」が接続詞なのか前置詞なのか、判断のしようがないのが実態です。

121 劉尹与桓宣武共聽講、依記。〔世説新語〕言語

劉尹（と）桓宣武と共に『礼記』を講ずるを聴く。

122 王右軍与謝太傅共登冶城。〔世説新語〕言語

王右軍（と）謝太傅と共に冶城に登る。

121では「劉尹」と「桓宣武」が、122では「王右軍」と「謝太傅」が、それぞれ文頭に記されています。しかし、いずれも直下に副詞「共」（共に）があり、どちらの人物に重きを置いているのか、今一つ判然としません。上に掲げられているからとの理由で「劉尹」「王右軍」に重みをかけて訓読すれば、「与」を前置詞と解して、おのおの「劉尹桓宣武と……」「王右軍謝太傅と……」と読むこととなりますが、いずれも均等に重みがあるはずだと考えれば、「与」を接続詞と取り、「劉尹と桓宣武と……」「王右軍と謝太傅と……」と訓読することになります。果たして、どちらの訓読が優るのか？ 私目のには、気分の問題としてしか映りません。

次に、接続詞「与」が記されていない場合の並列語句の訓読を観察しておきましょう。

123 劉尹・王長史同坐。〔世説新語〕品藻

劉尹・王長史同に坐す。

124 潘安仁・夏侯湛並有美容。(『世説新語』容止)
潘安仁・夏侯湛並に美容有り。

文頭に「劉尹」と「王長史」、そして「潘安仁」と「夏侯湛」が主語として接続詞を介さずに並べられています。このような場合は、右のごとく記号「・」で切ってしまうのが便法です。けれども、並列される語句が人名・国名・地名などの固有名詞でない場合に「・」で切るのは、必ずしも好まれません。では、どうするかというと、接続詞「与」がなくとも、例の定型「A与B」に準じて、並列要素の一つひとつに格助詞「と」を付けて訓読する訓法があるのです。たとえば――

125 吾聞、漢購我頭千金邑万户。(『史記』項羽本紀)
吾聞く、漢我が頭を千金と邑万户とに購ふと。
126 〔晏子〕以二節儉力行、重於齊。(『史記』管晏列伝)
〔晏子〕節儉と力行とを以て齊に重んぜらる。

125では「千金」と「邑万户」が、126では「節儉」と「力行」が、いずれも接続詞「与」を介さずに並列されています。このような場合、「与」が見えずとも、あたかも「与」が記されているかのように、並列要素それぞれに格助詞「と」を添えて訓読することがあります。むしろ、右の二例は並列要素がすべて短い名詞ですから、「・」を用いて、「購……千金・邑万户」(千金・邑万户に購ふ)または「以二節儉・力行」(節儉・力行を以て)と訓読しても、著しい不自然さは生じません。けれども、並列要素が文であると、「・」で切るわけにはゆかなくなりま

す。

127 独樂、与人樂、孰樂？……与少樂、与衆樂、孰樂？(『孟子』梁惠王下)
独り樂を樂しむと、人と樂を樂しむと、孰れか樂しき？……少と樂を樂しむと、衆と樂を樂しむと、孰れか樂しき？

ここに見える三つの「与」は、すべて前置詞で、接続詞ではありません。ですから、上文の二つの選択肢「独樂、与人樂」と「与少樂、与衆樂」は、何ら接続詞を介さず、ただ単純に並列されているだけです。この選択肢は、二つの選択肢「与少樂、與人樂」と「与衆樂、與人樂」も同様です。この選択肢は、それぞれが文を成していますので、単に「・」で切ると、上文は「独り樂を樂しむ・人と樂を樂しむ、孰れか樂しき？」、下文も「少と樂を樂しむ・衆と樂を樂しむ、孰れか樂しき？」となってしまう、それなりに意味は通じるとはいえ、まともな日本語に聞こえません。そこで、やはり例の定型「A与B」を応用し、右のごとく並列要素に逐一「と」を付けて訓読しておけば、落ち着いた響きの訓読になるわけです。要するに、前置詞「与」との紛らわしさを踏まえつつも、112の一般形「A与B」(AとBと)を柔軟に応用することが接続詞「与」の肝腎な点です。このほか、漢文の等位接続詞には、英語の接続詞(「and」)に相当する「或」や「如」「若」がありますが、「あるいは」「もしくは」も今なお日本語として用いられている言葉ですので、読みさえすれば、ただちに意味が了解できるはずです。いずれについても返り点は必要ありません。

〔唐〕柳宗元「種樹橐駝伝」

129 方六七十如シクハ 五六十、
求也為ムレバ之、比ヲ及フ三ニ年一、可シ使ム足ラ民。ヲ

『論語』先進

を足らしむべし。

時に軍役若しくは水旱有れども、民困乏せず。

「或」が連用されて「或……或」

131 今之刑賞、或^{イハ}由^リ二喜怒^ニ、或^{イハ}出^ツ二好惡^{ヨリ}。

今の刑賞、或いは

200

133
而
·
而
·
而
·
而

古田島洋介

少なくなっている印象ですが。

と意識しておかねばなりません。

134 吾友張也、為

吾が友張や、能

の「然り而うして」も軽々には捨て難いというのが率直なところです。

ii 從屬接統詞

「each time, every time, whenever」と類義の「毎」などがありますが、

「若」^{もシ}「如」^{もシ}「苟」^{いヤシクモ}や「縦」^{たとヒ}が返り点を要求しない一方、「雖」^{いヘドモ}や「毎」^{ごと}は返り点で下から返って読む必要が生じます。とはいえ、いずれも読み方さえ心得ておけば、解釈に戸惑うことはありません。

135 如有^シ王者^{ラバ}、必世^{ズニシタルニ}而後^{ナラン}仁。^{〔論語〕子路} *世^ニ三十年。

如^もし王者^{わうじや}有^あらば、必^{かなら}ず世^よにして而^{しか}る後^{のち}に仁^{じん}ならん。

136 若^シ孔子^ト主^ト「難^ト疽^ト与^ト「侍人^{じんせきくわん}瘠^{さく}環^{わん}、何^{ナニ}以^{もつ}為^な「孔子^{こうし}?!^{〔孟子〕}万章^{ばんしやう}上^{じやう}」

若^もし孔子^{こうし}難^{なん}疽^じと侍人^じ瘠^{せき}環^{くわん}とを主^{しゅ}とせば、何^{なに}を以^{もつ}て孔子^{こうし}と為^なさん

や!?

137 匠^や也^{ヒナリ}幸^{シクモ}。苟^{ラバ}有^あ過^ち、人^{ひと}必^{かなら}知^し之^{これ}。^{〔論語〕述而}

*丘^い孔子^{こうし}の自称^{じしやう}。

丘^{きう}や幸^{さい}ひなり。苟^いし^{くも}過^{あやま}ち有^あらば、人^{ひと}必^{かなら}ず之^{これ}を知^しらしむ。

138 予^よ縦^じ不^ふ得^と大^{たい}喪^{さう}、予^よ死^し於^お道^{だう}路^ろ一^{いつ}乎^や?!^{〔論語〕子罕}

予^た縦^じ大^{たい}喪^{さう}を不^ふ得^とずとも、予^よ道^{だう}路^ろに死^しせんや!?

139 縦^じ江^{かう}東^{とう}父^ふ兄^{けい}憐^{あは}、而^わ王^{わう}我^{われ}何^{なん}面^{めん}目^{もく}見^み之^{これ}?!^{〔史記〕項羽本紀}

縦^たひ江^{かう}東^{とう}の父^ふ兄^{けい}憐^{あは}れみ^みて我^{われ}を王^{わう}とすとも、我^{われ}何^{なん}の面^{めん}目^{もく}ありてか

之^{これ}を見^みん!?

140 回^{かい}雖^モ不^ふ敏^{びん}、請^こ事^{こと}斯^こ語^ご二^ニ矣^や。^{〔論語〕顔淵} *回^{かい}顔^{げん}回^{かい}の自称^{じしやう}。

回^{かい}不^ふ敏^{びん}なりと雖^モも、請^こふ斯^この語^ごを事^{こと}とせん。

141 其^そ身^み不^ふ正^{せい}、雖^モ令^し不^ふ從^{じゆ}。^{〔論語〕子路}

其^その身^み正^{せい}しからざれば、令^しずと雖^モも從^{じゆ}はず。

142 每^{まい}漢^{かん}使^し入^い匈奴^{きやうど}、輒^{しやく}報^{ほう}償^{しやう}。^{〔史記〕匈奴列伝}

漢^{かん}の使^しひ匈奴^{きやうど}に入^いるごとに、匈奴^{きやうど}輒^{しやく}ち報^{ほう}償^{しやう}す。

少し注意しておくべきは、140の「雖」です。ふつう「雖」は141のごとく逆接の仮定条件「たとえ」としても「を」を表しますが、140のように「雖」が主語（ここでは「回」）の下に記されると、逆接の確定条件「事実」ではあるが「を」を表すことが多いのです。つまり、140は「私〈回〉は実際〈不敏〉ではありますが」という意味合いになります。念のため、同じく逆接の確定条件を表す「雖」の例を、もう一つ挙げておきましょう。139の直前に出てくる一文です。

143 江^{かう}東^{とう}雖^モ小^{ナリト}、地^ち方^{ほう}千^{せん}里^り、衆^{しゆ}数^{すう}十^{じふ}万^{まん}人^{にん}、亦^{また}足^たレ王^{わう}也^や。^{〔史記〕項羽本紀}

江^{かう}東^{とう}小^{せう}なりと雖^モも、地^ち方^{ほう}千^{せん}里^り、衆^{しゆ}数^{すう}十^{じふ}万^{まん}人^{にん}、亦^{また}王^{わう}たるに足^たるなり。

この「雖」も主語「江東」の下にありますので、逆接の確定条件を表し、「江東雖小」は「江東」は、たしかに狭い土地ではあるけれども「の意味になります。このような主語と「雖」の位置関係は、常に意識しておく必要があるでしょう。138および139から察せられるとおり、「縦」は主語の上にあっても下にあっても、逆接の仮定条件「たとえ」としても「の意味に変わりはありません。

ただし、漢文の従属接続詞には、警戒を要する一語があります。それは「使」です。見たとたん、「使」は使役動詞ではないか、と思う向きも多いでしょう。たしかに「使」は、英語の使役動詞〈make〉が作る構文〈make someone do〉と同じく、「使（人）V」なる語構成を取り「使（人）V」（人）をしてVせしむ）と訓読するのが定石です。

けれども、漢文では、その「使」が、英語〈使〉に相当する仮定の従属

接続詞にもなるのです。しかも、その訓読は、あっさり「使」(もし)と訓じても差し支えないものの、伝統的には、使役の訓法をそのまま転用し、あたかも使役のように「使」(人) V「(人)をしてVせしめば」と読むことになっているのです。要するに、左に掲げる144と145は、読み方こそ異なれ、仮定の従属節としての意味はまったく同一ということになります。

144 使^シ S V^セ 使^シ S V^セ ば 〓 もし S が V したとすれば
145 使^シ S V^セ S をして V せしめば 〓 同右

145 のような読み方ですと、つい使役の言い回しにつられて、すぐ「S に V させたならば」と解釈したくなりますが、そうではありません。144 と同じく「もし S が V したとすれば」の意に理解するのが基本です。

146 使^シ 武安侯^{ラバ} 在^ラ 者^セ、族^{セン} 矣^シ！(『史記』魏其武安侯列伝)

* 族^{セン} 〓 一族を皆殺しの刑に処す。

武安侯^{ラバ}をして在^ラらしめば、族^{セン}せん！

これは145式の訓読です。「もし武安侯がまだ生きていたら、一族もろとも皆殺しの刑にしてやるところだ」という物騒な発言ですが、すでに武安侯は死んでいるので、英語ならば仮定法すなわち反実仮想法を用いるところでしょう。144式の訓法を採ると、次のようになります。

147 使^シ 武安侯^{ラバ} 在^ラ 者^セ、族^{セン} 矣^シ！

使^シ 武安侯^{ラバ} 在^ラらば、族^{セン}せん！

どう見ても、この147のほうが、使役もどきの146よりも、すっきりした印象で、意味もわかりやすいのですが、伝統的には145式の訓法のほうが優勢です。

もっとも、使役に聞こえて紛らわしいとはいえ、伝統的な145の読み方に救われる場面もあります。それは、仮定のうえに、さらに仮定が重なって現れる場面で、訓読に変化をもたらすことができるからです。

148 如有^シ 周公之才之美^ニ、使^シ 驕且吝^ツ、其餘不^レ足^レ觀^ニ也^ハ已^ミ。

(『論語』泰伯)

如^シし周公の才の美有^ハりとも、驕^{ケウ}且^ツつ吝^{リン}ならしめば、其^ソの餘^ヨは觀^ミるに足^ラらざるのみ。

ここでは、145「使^シ S V^セ」の〈S〉が省略され、同じく述語として〈V〉ではなく、二つの補語「驕」と「吝」が「且」で並列されています。冒頭の「如」は、「たとえ」でも「意。英語 even がそのままだ」の意味にもなることを想えば、この意味変化は、それほど不思議ではないでしょう。中途の「使」は「もし」だとすれば「意ですつまり、この一文では仮定を表す二つの語「如」と「使」が重なっているわけです。この「使」を144式に「使^シ」と訓ずると、上文の「如^シ」と言葉が重複してしまい、誤りではないものの、今一つ気の利かぬ響きになってしまいうでしょう。冒頭の「如」を「如^{タトヒ}」と訓じて重複を避ける手もあります。この「如」を「たとひ」と読むのは、かなり変則的な読み方です。いささかためらわれます。そこで、「使」を右のように145式に読めば、「もし」の重複を回避できるうえ、伝統にもかなった訓読です。

ので、まずは一安心となるわけです。144と145の二刀流は、臨機応変、なかなか役に立つかと思いますが、いかがでしょうか？

むろん、右の説明からは、一つ重要なことが抜け落ちています。それは、使役の「使」を用いた字句が従属節として仮定を表す場合、つまり「もし〜に…させたならば」の意味になる場合です。これを理解するには、漢文が本来的に有する次のような性質を念頭に置いておかねばなりません。

149文1（＝条件・仮定、原因・理由）、文2（＝結果、帰結）。

漢文では、特に条件・仮定または原因・理由を表す言葉がなくとも、単に二つの文を並べただけで、上文||文1が条件・仮定または原因・理由を、下文||文2がその結果または帰結を表すことができるのです。左の例を見れば、そのような論理関係が容易に察せられるでしょう。

150 慎終 追遠、民徳帰厚矣。（『論語』学而）
終はりを慎み遠きを追へば、民の徳厚きに帰す。

上文「慎終追遠」に条件・仮定を表す字句は見当たりません。けれども、その末尾を「追」（追へば）と訓じ、下文「民徳帰厚矣」に結びつけています。このような訓読が可能となるのは、149のような漢文の性質を前提としていればこそその話にはかなりません。したがって、上文に使役「使」を用いた文が入れば、それを仮定・条件として下文に結びつける場面が生じることもあります。

151 使民 衣食有餘、自不為盜。

民をして衣食に餘有らしめば、自づから盜を為さざらん。（『十八史略』卷五「唐」太宗文武皇帝）

「使」を「使」（しめば）と訓じているので、一瞬「使」（もし）とも読める仮定の「使」と速断しがちですが、この上文は仮定・条件「民衆に対して日常生活に十分な余裕を与えてやれば」を表し、その結果・帰結を下文「自然に盗みを働かなくなるだろう」が表しているのです。この「使」は、あくまで使役の「使」（しむ）、それが仮定・条件を表すために、たまたま「使」（しめば）と訓読されたものと考えるのが適切でしょう。

以上のごとく、従属接続詞「使」を用いた字句には、仮定なのか使役なのか、なかなか面倒な問題がからまります。となれば、144のように「使」（もし）と訓ずると仮定の意味に限定されてしまうので、取りあえず145のごとく使役もどきに「使」（しめば）と読んでおくほうが無難でもあるわけです。仮定と使役を両天秤に掛けたごまかしと言えはごまかしかもしれませんが、これも漢文訓読における実知の一つと見なせるでしょう。

⑨ 間投詞（感嘆詞）

漢文の間投詞には、「已 矣乎」や「不 図」「不 意」などがあります。「已んぬるかな」は「もうおしまいだ、どうしようもない」意の嘆きを、「図らざりき」「意はざりき」は「まさか」とは思わなかった、よもやとは予想もしなかった」意の驚きを表します。

152 已^レ矣^ハ乎^ナ！ 吾未^レ見^ニ好^ム德^ヲ如^レ好^ム色^ヲ者^ニ也。^{（『論語』衛靈公）}

已んぬるかな！ 吾未だ徳を好むこと色を好むが如くなる者を見ざるなり。

153 不^レ図^ハ、為^レ樂^ヲ之^ニ至^ニ於^ニ斯^ニ也^ハ！^{（『論語』述而）}

図らざりき、樂を為ることの斯に至らんとは！

154 賈^ハ、不^レ意^ハ、君能^ニ自^ニ致^ニ於^ニ青雲^ノ之上^ニ！^{（『史記』范雎蔡澤列伝）}

* 賈＝須賈の自称。

賈、意はざりき、君能く自ら青雲の上を致さんとは！

ただし、間投詞の代表と言えば、やはり嘆声を表す「ああ」でしょう。英語の嘆声ならば、〈Ah〉は「ああ」、〈Oh〉は「おお」くらいに訳し分けたりもするでしょうが、面白いことに、漢文では、一字の「噫」も「嗟」も「嘻」も、そして二字の「噫嘻」も「嗟乎」も「嗚呼」も、ことごとく「ああ」一本槍で済ませてしまうのです。当然のことながら、中国語としては、字種や字数が異なれば、発音も異なります。それぞれの現代中国語音を片仮名書きの近似音で示すと、「噫」は「イー」、「嗟」は「ジェ」、「チエ」、「嘻」は「ビ」、「シー」となり、「噫嘻」は「ビビ」、「イーシー」、「嗟乎」は「ジェ・フ」、「チエ・フ」、「嗚呼」は「ウ・フ」です。しかし、漢文訓読では、そうした発音の違いは不問に付し、すべて一律に「ああ」と読んでしまします。一字と二字の例を一つずつ挙げておきましょう。

155 顔淵^ス死^ス。子^ツ曰^ク「噫[！] 天喪^レ予^ヲ、天喪^レ予^ヲ。」^{（『論語』先進）}

顔淵死す。子曰く「噫！ 天予を喪ぼせり、天予を喪ぼせり」

と。

156 嗚呼[！] 曾^チ謂^ハ「泰^ハ山^ヲ不^レ如^ニ林^ノ放^ニ乎^ナ？」^{（『論語』八佾）}

嗚呼！ 曾ち泰山を林放に如かずと謂へるか？

場合によっては、嘆声が繰り返されることもあります。

157 嗚呼[！] 噫嘻[！] 我知^レ之^ヲ矣^ハ。^{（『宋』蘇軾「後赤壁賦」）}

嗚呼！ 噫嘻！ 我之を知れり。

人の発する嘆声には、いろいろな音があるはずですが、すべて「ああ」一語で処理してしまう漢文訓読は、好く言えば統一的な能率主義、悪く言えば十把一絡げの型押し主義ということになるでしょう。

⑩ 句末助詞・文末助詞

漢文では、句末や文末に助詞を添えることがあります。これは、孤立語たる古典中国語が持つ膠着語的な性質ですので、膠着語たる日本語にとって処理しやすい語だと言えるでしょう。

句末助詞の代表は、「也」「者」「哉」「乎」などです。この種の助詞は、さまざまな語気・機能を持ちますので、主要な働きを説明するだけにとどめます。

「也」は、通例「也」と読み、一瞬の停顿を生じて、上の語句を提示する機能を發揮します。

158 子^{スル}之^ヲ哭^キ也^ハ、耄^ニ似^ニ重^ニ有^ニ憂^ニ者^ニ。^{（『礼記』檀弓下）}

子の哭するや、壺に重ねて憂へ有る者に似たり。

「者」は、主語に付いて、主語に関する説明・判断を引き出します。ただし、訓法は不安定で、「者」と読んで「S者」「S者」としたり、また、単に「S者」と読んだり、「者」を置き字にして「S者」と訓じたりもします。今、最後の方式を採って訓読してみよう。

159 扁鵲者、勃海郡鄭人也。〔《史記》扁鵲倉公列伝〕

扁鵲は、勃海郡鄭の人なり。

「哉」は、しばしば「哉」と読んで、感嘆文に用いられます。英語の感嘆文〔How + 形容詞〕が、漢文では〔形容詞 + 哉〕になると思っておけば宜しいでしょう。「乎」も同様です。文末で「也」が呼応しているときは、「也」ではなく、「也」と読みます。

160 孝哉、閔子騫！〔《論語》先進〕 * 閔子騫＝孔子の門人。

孝なるかな、閔子騫！

161 惜乎、夫子之説君子也！〔《論語》顔淵〕

惜しいかな、夫子の君子を説くや！

文末助詞の代表は、「也」「乎」「耶」「矣」「焉」「耳」「而已」などです。これらについても主たる働きだけを説明したいと思います。

文末の「也」は、右のような感嘆文の場合を除き、ふつう「也」と読めます。ただし、この「也」が断定を表すと考えるのは早計で、それは、読みに用いる「なり」が断定の助動詞だから「也」も断定の意味だろう

と当て込んでいるに過ぎません。漢文の「也」は、説明・判断を表す文末に置かれる助詞で、159で見た主語に関する説明・判断を引き出す「者」と相性が良く、実際159のように、しばしば「S者く也」の形式で多用されます。もっとも、「者」と「也」が相関語句として常に上下で呼応するわけではなく、どちらか一つが省略されることも珍しくありません。これは、漢文の相関語句に見られる著しい特徴です。

162 辭讓之心、礼之端也。是非之心、智之端也。〔《孟子》公孫丑上〕

辭讓の心は、礼の端なり。是非の心は、智の端なり。

「乎」は、「乎」と読んで疑問を、「乎」と訓じて反語を表すのが基本です。「邪」「耶」も同じと考えてください。

163 可謂仁乎？〔《論語》雍也〕

仁と謂ふべきか？

164 法語之言、能無從乎？〔《論語》子罕〕

法語の言は、能く従ふこと無からんや！

「矣」は、完了を表したり、断言の語気を表したりしますが、大半の「矣」は置き字として扱われます。完了の典型は、74のように相関語句「已……矣」を用いる形式で、完了の助動詞「り」を添えて訓読することが好まれますが、副詞「已」が記されていない場合も多いので、決めつけは禁物です。「矣」が断言の語気を表す場合、特別な措置は講じられません。次の「焉」に関する説明との関係上、断言の「矣」については150を再掲しておきます。

165 由也升^レ堂^ニ矣。未^ダ入^ル於^ニ室^ニ也。〔『論語』先進〕 *由^ニ子路。

由^ニ堂^ニに升^ルり。未^ダだ室^ニに入^ルらざるなり。

150 慎^シ終^ヲ追^フ遠^ニ民^ニ徳^ニ帰^ス厚^ニ矣。〔再掲／『論語』学而〕

終^ヲはりを慎^ムみ遠^ニきを追^フへば、民^ニの徳^ニ厚^ニきに帰^スす。

「焉」は、甚だ厄介な助詞で、表す意味合いは文字どおり多種多様、とうてい明確に解説できる自信が持てません。情けないながら、「たいていは置き字になります」くらいの説明しかできないのが実情です。⁽¹⁴⁾たとえば、左の用例を見てください。

166 一日克^チ己^ニ復^ニ礼^ヲ、天下^ニ歸^ス仁^ニ焉。〔『論語』顔淵〕 *復^ニ履。

一日^ニ己^ニを克^チちて礼^ヲを復^スめば、天下^ニ仁^ニに帰^スす。

末尾の「天下歸^ス仁^ニ焉」は、右に再掲したばかりの150の末尾「民徳帰^ス厚^ニ矣」とよく似ています。けれども、片や「矣」、片や「焉」と記されており、果たして「焉」が「矣」と同じく断言を表すのか、断言以外の語気を表すのか、もし断言を表すとしても「矣」と「焉」に何か微妙な違いがあるのか等々、どうにもお手上げの状態というのが正直なところでは。私見では、「矣」はスパッと言い切るような感じの断言、「焉」はグイッと念押しするような印象の断言かと思うのですが、「スパッと」だの「グイッと」だのでは説明にならぬと言われれば、それまで。もしかすると、文末助詞「焉」については、気にしすぎないようにするのが最善の策なのかもしれません。

「耳」や「而已」は、限定・強調を表します。このほかにも「爾」

「已」「已矣」「也已」「而已矣」「也已矣」など、「のみ」と読む字句は、一〇三字にわたり、甚だ変化に富むのが実態です。一〇三字それぞれの例を一つずつ挙げておきましょう。

167 偃^ハ之^ニ言^ハ、是^ニ也。前^ニ言^ハ戲^ニ之^ニ耳。〔『論語』陽貨〕 *偃^ニ子游。

偃^ハの言^ハ、是^ニなり。前^ニ言^ハは之^ニに戯^ニれしのみ。

168 吾^ハ所^ニ以^テ告^ス子^ニ、若^シ是^ニ而^ニ已^ニ。〔『史記』老子韓非列伝〕

吾^ハの子^ニに告^スぐる所以^ハは、是^ニの若^シきのみ。

169 夫子之道^ハ、忠恕^ニ而已^ニ矣。〔『論語』里仁〕

夫子^ハの道^ハは、忠恕^ニのみ。

以上、英語の品詞分類を下敷きとしつつ、漢文の各品詞について概観を試みました。⑩句末助詞・文末助詞だけは、英語に見られない漢文独自の品詞ですが。

それ以外の品詞および文型に関しては、引き続き次号で検討したいと思えます。

【注】

(1) 餘談ながら、英語の〈仮定法〉は、文法用語として甚だ拙い名称で、文語文法における推量の助動詞「まし」が持つ反実仮想の意味を取り来って、〈反実仮想法〉と呼ぶべきだというのが長年私の私見である。実際、さほど英語力の高くない大学生は、〈仮定法〉という名称に引きずられ、「If it rains in the afternoon, I won't go to the party.」のような一文に見える〈節〉「もし午から雨が降るのなら」をも仮定法だと誤解している向きが少なくない。たしかに〈仮定法〉と名づける以上、こうした仮定を表す〈節〉を〈仮定法〉の範疇に入れるなど言うほうが無理だろう。「この〈節〉は、仮定ではなく、条件の表現だ」と言い張るのは、つまらぬ強弁である。英語の〈仮定法〉は、フランス語の〈条件法〉に相当するのだから。とにかく英語の〈仮定

法」は、即刻〈反実仮想法〉と呼称を改めるべきである。この問題については、かつて国際日本文化研究センターの牛村圭教授と話をしたときにも、まったく意見を同じうした。

- (2) 吉田賢抗『論語』(明治書院《新釈漢文大系》、一九六〇年)二八八―二八九頁。金谷治『訳註』『論語』(岩波書店《岩波文庫》、一九六三年)一七七頁。宮崎市定『論語の新研究』(岩波書店、一九七四年)二九七頁。吉川幸次郎『論語』中(朝日新聞社《中国古典選》、一九七八年)一五五頁。加地伸行『全訳註』『論語』(講談社《講談社学術文庫》、二〇〇四年)三〇〇頁。

- (3) 注(2) 吉田同書二八九頁。

- (4) 注(2) 金谷同書同頁。

- (5) *Confucian Analects*, tr. etc. by James Legge, *The Chinese Classics* v. 1, reprinted by SMC Publishing Inc., Taipei, Taiwan 1991: 14-18-2, p. 282.

Confucius, *The Analects*, tr. by D. C. Lau, *The Chinese University Press*, Hong Kong, 1979: Book 14-17, p. 137.

The Analects of Confucius, tr. etc. by Chichung Huang, *Oxford University Press*, New York, 1997: Book 14-17, p. 144.

The Analects of Confucius, tr. by Burton Watson, *Columbia University Press*, New York, 2007: Book 14-18, p. 99.

Confucius, *The Analects*, tr. etc. by Amping Chin, *Penguin Books*, Penguin Group, 2014: Book 14-17, p. 230.

- (6) 注(5) 所掲五書の諸処。

- (7) 私の知るかぎり、漢文訓読が歴史的現在を前提とすることを明文化しているのは、齋部広成『古語拾遺』(岩波文庫、一九八五年)の校注者たる西宮一民氏が、その凡例の第四条で訓読文(書き下し文を指す)の作成要領を述べ、その(八)に「時制は歴史的現在で訓み、敬語は適宜補読した」(四頁)と記している一例のみである。

- (8) ただし、日本語の動詞の活用変化は、たとえば英語の動詞の活用変化とは原理をまったく異にする。日本語の動詞は、仮定条件か(未然形) 確定条件か(已然形)、下接する語が用言か(連用形) 体言か(連体形)、および文を単に終止させるか(終止形) 命令によって終止させるか(命令形) によって活用が分岐するが、英語の動詞は、時制・人称・単複によって活用が分かれる。

- (9) たとえば、注(2) 所掲の加地書は、96・98に見える「与」をすべて明確に「その人」と訳している(二一四頁)。単用前置詞「与」を、「与」其人」(其の人と)の「其人」が省略されたものと把握した結果であろう。

- (10) 注(2) 所掲の諸書は、いずれも101の前半に見える「夫人之為慟」を、語順そのま

まに「夫人之為慟」(夫の人の為に慟す)と訓じているが、これは承服し難い読み方である。「夫の人の為に慟す」ならば、語順は「為夫人慟」でなければならぬまい。「夫人」を強調すべく、単に前置詞「為」と倒置したのであれば、「夫人為」となるはずで、「之」字が入る余地はないだろう。按ずるに、当該五字は、「為夫人慟」の名詞「夫人」と前置詞「為」が倒置され、その倒置の標識として「之」字が加えられたものであるのか。今「夫の人の為に慟す」と読んだのは、「之」を倒置の標識と解しての訓読である。倒置の標識「之」は同じく『論語』に散見し、次のような例がある。

・父母唯其疾之憂。(為政)

父母には唯だ其の疾を之憂ふるのみ。

・言不辱身之速也。(里仁)

言を之出ださざるは、身の速はざるを恥づればなり。

・何必公山氏之之!?(陽貨)

何ぞ必ずしも公山氏に之之かんや!?

それぞれ動詞「憂」「出」「之」の目的語「其疾」「言」「公山氏」を強調すべく動詞の上方に置いた結果、その倒置を表す標識として「之」が両者のあいだに挿入されている。差し当たり、問題の「夫人之為慟」も右に同様の語構成と考えられよう。

ただし、「差し当たり」と言うのは、右の三例がすべて動詞と目的語が倒置されたために「之」が現れたものであり、いずれも前置詞と名詞との倒置ではないからだ。もし倒置の標識「之」が正置(動詞+目的語) ↓倒置(目的語+「之」+動詞)に限定用いられるとすれば、問題の五字は左のように訓読するのが好ましいのかもしれない。

非夫人之為慟、而誰為!?

夫の人を之慟するを為すに非ずして、誰に為さん!?

- (11) 未だ明確な結論には達していないが、右に当面の考察を記して後考を俟つ。

- (12) 皇侃『論語義疏』は、末尾に「慟」字を加えて「誰為慟!?(誰が為に慟せん!?)」に作る。

- (12) 明治三十八年(一九〇五)十二月二日付《官報》第5658号所載の文部省告示第一五八号「文法上許容すべき事項」全十六項の第十三項に、「語句ヲ列挙スル場合ニ用キルてをハ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルキニ限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ」とあり、例として「月ト花」「宗教ト道德ノ関係」「京都ト神戸ト長崎ヘ行ク」を挙げ、さらに丁寧に「最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例」として次の二文を示している。

・史記ト漢書トノ列伝ヲ読ムベシ

・『史記』と『漢書』の並列。『史記』と『漢書』両書の列伝を読め」との意。
・史記ト漢書ノ列伝ヲ読ムベシ

＊『史記』と『漢書』列伝の並列。『史記』全体と『漢書』の列伝を読め」との意。

たしかに、「ト」を一つだけ使って「史記ト漢書ノ列伝ヲ読ムベシ」と記したのでは、右のいずれの文意なのか、ただちに曖昧に陥ってしまう。翻って言えば、並列要素に逐一「と」を付ける習慣をほぼ失った現代日本語は、こうした曖昧さに対して甚だ鈍感だとも考えられるだろう。

(13) 「雖」の位置が主語の上であろうと下であろうと、書き下し文が同一の字句になってしまふことは、銘記しておかねばなるまい。143に添えたとおり、確定条件「江東雖小」の書き下し文は「江東小なりと雖も」であるが、主語「江東」と「雖」の語順が逆転した仮定条件「雖江東小」でも、やはり書き下し文は「江東小なりと雖も」となる。近時、「も」と生徒・学生が漢文に親しみやすくなるよう、積極的に書き下し文で読ませるべきだ」という意見を聞くこともあるが、この「江東小なりと雖も」でわかるように、書き下し文は、漢文の語順の差異から生じる意味合いの相違を、必ずしも忠実に反映できるとは限らない。こうした欠陥をわきまえずに書き下し文の積極的な使用を諷うのは、いささか無責任かと思われる。もし書き下し文の使用を強く推し進めるのであれば、何よりもまず、たとえば「丘の学を好むに如かざるなり」(『論語』公治長／丘孔子の自称)について二種の原文「不_レ如_レ丘之好_レ学也」および「不_レ如_レ好_レ丘之学也」を指定する実力を有し、さらに両者の意味の違いを正確に説明できるような教員を育成・確保する必要がある。その種の手続きなしに、『論語』の原文がそうなっているという理由だけで、いきなり前者の意味のみを押しつけるような指導では、とうてい漢文好きの生徒・学生が増えるとは思えない。漢文訓読の口調に慣れさせるだけならばまだしも、解釈まで含めるとなると、書き下し文を用いての指導は、なかなか骨が折れるのである。

(14) 梁実秋「主編『遠東袖珍英漢・漢英辞典』(遠東圖書公司、一九八一年／第三版一九八五年、台北)の『漢英辞典』の部に見える「焉」の釈義は、(a final particle indicating numerous senses) (p. 313r/ no. 3204) と記されてゐる。訳せば「多数の意味を示す文末助詞」となる。要するに「さまざまな意味がある」と言っているだけだ。中国人にとっても、文末助詞「焉」は甚だ解説しづらいようである。

〔附記〕

前号一三頁上段に「日本語と同じく、訓読みという現象が数多く見られる言語は、私の知るかぎり、いや、知ったかぶりをするかぎり、中世ペルシア語(いわゆるパフ

ラヴィー語 Pahlavi)だけです。」と記したが、その後、ペルシア語に熟達した北原圭一氏に確認を求めたところ、「ウズワリーシュンは、バルティア語など、中世イラン語のなかでも、主にアラム文字を基にした文字で表記する他の言語にも見られた現象で、正確には中世ペルシア語だけとは言えないかもしれないと」の指摘をいただいた。そこで、あわてて前号二五頁の注(17)に掲げた黒柳恒男『ペルシア語の話』(大学書林、一九八四年)を読み直してみたところ、「中世イラン語でこれ(『ウズワリーシュン(訓読語詞)が用いられるのは中世ペルシア語、バルティア語、ソグド語の三言語である(六四頁)と明記されていた。私が「中世ペルシア語(いわゆるパフラヴィー語 Pahlavi)だけ」と記したのは、文字どおり粗忽な「知ったかぶり」にすぎなかったわけである。ここに当該部分を「中世ペルシア語(いわゆるパフラヴィー語 Pahlavi)のほか、バルティア語・ソグド語など、中世イラン語だけです」と訂正し、北原氏に厚く御礼を申し上げるとともに、読者諸賢に対して深くお詫びを申し述べたい。

ちなみに、北原氏は、東京外国語大学・中央大学・明治大学などでペルシア語やイスラム文化論を講じ、外務省研修所でペルシア語主任講師をも務める俊秀である。同氏の御教示によれば、「ハサン・イブン・アリー」と記された人名の「イブン」(アラビア語)を、わざわざ「ベサレ」(ペルシア語)と読み換えるイラン人に出会うことがあり、これもウズワリーシュン(現代ペルシア語では「ホズヴァーレシュ」)の名残と言えるかもしれないとの由である。